

巻頭インタビュー

家庭料理が「安心」をつくる

料理研究家

土井善晴

Yoshiharu Doi

聞き手

春畑セロリ（作曲家）

料理研究家としてご活躍の土井善晴さん。フランス料理や日本料理のプロでありながら、現代日本の家庭で料理する人々の視点に立ち、家庭料理の本質を提案しています。特に、近年出版された『一汁一菜でよいという提案』は、昔から家庭料理の基本とされる「一汁三菜」という言葉を重荷に感じていた多くの人々の共感を呼び、世代を超えて支持されました。7月、東京都内でお話を伺いました。

“人は家庭を大事にしようと思ったとき、
無条件で「料理をがんばろう」と
思いますよね。”

○ どの・よしはる

料理研究家。1957年、大阪生まれ。スイス、フランスでフランス料理を学び、帰国後、大阪「味吉兆」で日本料理を修業。土井勝料理学校講師を経て、1992年に「おいしいもの研究所」を設立。変化する食文化と周辺を考察し、命を作る仕事である家庭料理の本質と、持続可能な日本らしい食をメディアを通して提案する。元早稲田大学非常勤講師、学習院女子大学講師。NHK Eテレ「きょうの料理」講師(1987年～)、テレビ朝日系「おかずのクッキング」レギュラー講師(1988年～)など。著書多数。近著に『一汁一菜でよいという提案』(グラフィック社)。

その場に応じること

春畑: FMラジオを聴いていたときのことで。番組で土井先生が「味噌汁は、だしがなくてもいい。野菜からだしが出るから、野菜をちぎって何でも入れたらいいんですよ」とお話しされていました。「だしは日本料理の基本」と思っていたので、その言葉に衝撃を受けました。それ以来、肩を張らずに料理していいんだと……。

土井: 「だしは日本料理の基本」なんてことはありません。多くの人々が、テレビやラジオ、新聞、SNSなどの情報をうのみにしていますが、それらは発信者にとって都合のいい形になっていることが多いと思います。日本では「ハレの日の料理」にスポットが当たり、それが日本料理の定番であるかのように世の中に浸透してしまっている。ぜいたくなだしは日常の暮らしには必ずしも必要ないんです。だしを使わないほうがよいことも多い。全ての料理の基本は水です。知らないうちに思い込まされているんです。誰かの思惑のある情報よりも、自分の感受性を大切にして、自分で見て感じたことを信じればいいのです。レシピのように、再現するために数値化したいという希望はわかりますけれどね。

春畑: “大さじ3杯”などと分量が提示されていると、それが正解と思ってしまいます。

土井: ただし、レシピより先にある条件を同じにすることは不可能ですから、「絶対的な料理の再現性」はありません。結局人間の感覚の方が正しいのです。その力を使わないとダメでしょ。昔、音楽を聴くのにノイズのないステレオに凝ったことがありました。よりクリアな音なんて思っているとノイズを聴いている自分に気付いたのです。結局、いい景色を見ながらドライブしているときに、ラジカセで聴くノイズいっぱい音楽のほうが感動するでしょう。そういうことに気が付いた。今の時代は、より正確なものを求めてノイズを排除するばかりだけれど、切り落としたところに大切な、人を感動させるものがある。楽譜どおりに完璧に演奏できれば技術が高いといえるかもしれませんが、でも、人が感動

するかは別の問題でしょう。音楽も料理も同じ。お料理の相手は自然ですから、素材と対話するように料理すればいいんです。人間の都合どおりにはいきません。そもそも音楽だってそうでしょう。東京大学の先端科学技術研究センターの中邑賢龍先生のプロジェクトで、プロ・オーケストラのトップのかたたちと旅行をするんだ、と伺ったのです。そこで自然の中や民家でハプニング的に演奏するんです。小澤征爾さんの発想だと思うのですが、いわく「行けば分かるよ。そこで演奏すれば分かる」とおっしゃった。

春畑: 自然の中でこそ生まれる音楽が、そこにあるのですね。

土井: 音楽で大切なのは、聴こえてくる音だけではありませんよね？ その場の環境やそこに存在する光、演奏者の気持ちや聴き手の気持ちも、全てに反応するんです。すると奇跡のような偶然が起こるというのです。「その場に応じる」とは「その瞬間を生きる」ということだと思うんです。

春畑: 料理と音楽は、思いの外近いものなののでしょうか。

土井: 音楽では視覚や聴覚は言語化できるのです。だから、意識化できて、離れたところにいる人とでも共有することができます。でも、味覚と嗅覚は言語中枢とはつながっていないのです。正確には半分しかつながっていない。だから、お料理はそこに一緒にいた人しか、「おいしさ」を共有できないんです。だから、食というコミュニケーションは、身近な人や、一緒に食べた人としか深めることはできません。そこに料理の意味があると思いますね。

“食べる人”より“作る人”

春畑: 土井先生がお好きな音や音楽は何ですか？

土井: クラシック音楽もポップスも幅広く楽しんでます。日本の古典音楽は自然の音に向かっていきますから、川のせせらぎや鳥のさえずりは心を癒やしてくれますよね。ほっとします。

春畑: 田舎に行くと、最初は何も聴こえないけれど、少し耳を澄ますと、いろいろな音が聴こえてきます。

土井: 小さな音は、大きな音に消されてしまいますから、きれいな音は静かにしていないと聴こえてこない。それに、街やテレビから聞こえてくる音ばかりに慣れてしまうと「聴く力」を失ってしまうんじゃないかな。もともと人は皆、自然と触れることで「聴く力」や「感じる力」をもつことができた。今の社会では自然の心地よさを重要視していません。たくさん破壊して汚してしまいました。「花がきれい」と言っても、お金にならない情緒は、切り捨てられてしまう世の中です。しかしこれからは、逆にそういうものが価値をもつ時代が来ると信じています。もう、お金に変えられるものは少なくなってきましたから。

春畑: 子どもたちが「感じる力」を身に付けるためには、どうすればよいのでしょうか？

土井: 自分でお料理して食べる。作って食べるの「作る」が大切だと思います。最近は「食べる」ばかりが目立っていて、「食べる人」だけがもてはやされている。でも「食べる人」はおなかやすいて機嫌が悪くなることもあるし、おなかをすかしてデパ地下を歩けば余計なものを買ってしまう。食べる人は既に冷静ではないのです。食べるだけの人に食文化はまかせられない。逆に“作る人”は食べる人を思って作る。それは一人暮らしでも同じ、自分を大切にすることになる。料理するという行為には不思議ですが、大切な何かが含まれていると思います。「料理することは、既に愛していること」です。

春畑: 買った食べ物と、家族が作った食べ物では全然違うということは、よく分かります。

土井: 買ったもののほうがおいしいかもしれない(笑)。でも、おいしさよりも大切なことが含まれている。家庭料理は栄養摂取だけではないでしょう。お料理は作った人の気持ちや自然、料理の背景にあるものと一緒に食べているんです。イメージーションを豊かにする学習機能があるんです。

春畑: 買ったものに対して、誰がどういう気持ちで作ったのだろうか、想像することはありませんものね。

土井: 誰が作ったのか分からない料理では、想像力や思いやりのある人間が育つとは思えません。作る側に立ったときでも、例えば、枝豆は「ゆで時間3～4分」と言われますが、3分と4分では全然違います。だから想像しなくてはなりません。「今日の豆はどうか」「小さいから若い豆だな」「柔らかそう」とか。だからレシピのゆで時間はあてにならない。ゆでているときに「どうか」「もう大丈夫かな」と、思うことが大事なんです。どうかなって思うことが心を動かすことです。

春畑: 土井先生の著書『一汁一菜でよいという提案』に書かれていた「ハッと心映えする瞬間」という言葉に、心を奪われました。「はあ、おいしい」「あっ、いい音」「何だろう、それ」など、何か気付いて心が動いた瞬間に、子どもたちは成長するのでしょうかね。

土井: 「もの喜び」ってこののですが、自分で気付いて心が動くこと。それは幸せになる力だと思うのです。そのような積み重ねを経て育った子どもたちは、物事を喜ぶことができるようになります。

人がしてくれた少しの変化に気付くことができるから。例えば、自分に出されたお料理に紅葉^{もみぢ}があしらわれていて「ああ、きれい」と思う、小さな心遣いを喜べることは幸せです。

おいしくなくてもいい、失敗なんてない

土井: 幼い頃から大人になるまで、きちんと作られたものを食べていたら、大概のことは分かるようになります。大人になると、いろいろな場面^{シチュエーション}で勘が働くでしょう？大学生で一人暮らしをするなら、自分で料理するといいですよ。

春畑: 「料理をした」という経験が役に立つ？

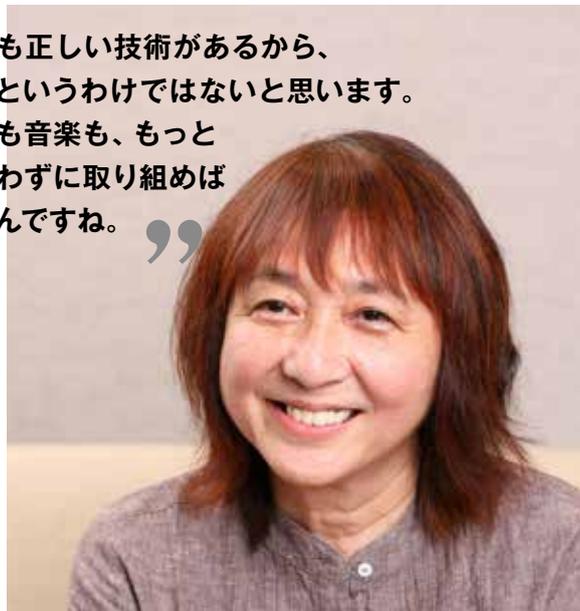
土井: 経験というよりも、「自分はちゃんと生きている」という自信につながるからですね。

春畑: おいしく作れたという自信……？

土井: いいえ、おいしくなくてもいいんですよ。ちゃんと生きていればいい。子どもが一人暮らしを始めると、きちんと食べているかどうか、親のいちばんの心配ですよ。「味噌汁ぐらいだけ作って食べてるよ」と子どもから聞けば、親は「ああ、うちの子しっかりしているな」と思うじゃないですか。子ども自身も自炊してご飯と味噌汁を食べていたら「自分もなかなかやるじゃん」と思えるわけです。料理することは「暮らし」という、生きる自信、「人生の背景や土台」をつくることではないでしょうか。

“

音楽も正しい技術があるから、
よいというわけではないと思います。
料理も音楽も、もっと
気負わずに取り組めば
いいですね。”



○ はるはた・せろり

作曲家。東京藝術大学卒業。鎌倉生まれ、横浜育ち。舞台、映像、イベント、出版のための音楽制作、作編曲、演奏、執筆、音楽プロデューサーなどで活動中。主な著作に『ゼツメツググシュノオト』（音楽之友社）、ピアノ曲集『ポポリラ・ポポトリンカの約束』（全音楽譜出版社、CDは日本コロムビア）、こどものためのピアノ曲集『ひなげし通りのピム』（カワイ出版）、児童合唱曲『キャプテン・ロンリーハート』『雨の樹のドラゴン』（教育芸術社）、書籍『ピアノのお悩み解決クリニック（全6巻）』（ヤマハミュージックメディア）などがある。

春畑: 毎日の食事をきちんとすることによって、生きる力が付いてくるのですね。

土井: 間違いなく付きます。人は自分が結婚することになって、家庭を大事にしようと思ったとき、無条件で「料理をがんばろう」と思いますよね。料理という行為は、人間であることの付帯条件だと思います。だから2人が幸せになるための土台である食事をどうするかって大問題をちゃんと話し合っ、考えないといけない。

春畑: 確かに親が「子どもにおいしいものを食べさせよう」と思うのは、本能的なものだと感じます。

土井: そうですね、誰にも教わらなくても、新しい家庭をもてばお料理ががんばろうと思うんですね。だけど、料理したいと思っていても、仕事や家事や子育てなど大変な状況の人がたくさんいます。だから、それを実現できないことに、悩んで、苦しむのです。それを、昔からの習慣で女性に委ねてきた。何もごちそうである必要は全くない、実現できるものでよいんです。それが「汁飯香」、一汁一菜でいいと言っているんです。ご飯があれば、あとは具沢山の味噌汁でいいのです。それなら、誰でも10分もすればご飯が食べられる。一汁一菜を日常の基本にすればいいのです。気持ちに、時間に、お金に余裕のあるときだけ、おかずを作ればいいんです。「料理する」ことを第一にするのです。家庭料理はいつもおいしいわけではないし、同じでも作るたびに味が違ってあたりまえなんです。同じ味でないといけないと言われるのは、それは商品を作っているからです。大きさも切り方もふぞろいで、ばらつきがあってよい。ふぞろいは家庭料理の特権です。家にはいろいろなことがあるでしょう。「いつもより、おいしいね。どうしたの?」「それはおばあちゃんが送ってくれた野菜なんだよ」って、さりげない日常の会話の中に深い意味があることが分かります。

春畑: 「あれ?お母さん今日ちょっと味薄くない?」「あらそう?」なんていう会話がができることが、幸せなんだと思います。みんな気負わずに、もっと料理すればいいんですね。とは言っても、失敗したらやっぱりガッカリ!(笑)

土井: 料理に失敗なんてないのです。作ろうとした料理の見本があって、写真のようにきれいにできないと、失敗だと思ってしまうのです。そんなこと全然気にしなくてもいいんですよ。いろいろあるからいいんです。人間は一人一人違うんです。違うことが前提です。

春畑: 絵を習うにしても、書道にしても、その先生の言うことだけが、正しいって思いがちですね。

土井: でも案外、日本って、そういった権威とかヒエラルキーとかイデオロギーのない場所に、すばらしいものが生まれている。例えば、漫画やラーメンがそうですね。彼らは本当に自由にいいと思うことをやる。それが、世界で通用するものを生み出すんでしょうね。心が自由であることが、既にパワーですね。みんな固定観念を捨てて、外に出ていくべきですね。人それぞれ、置かれている環境も本人の性格も全然違います。理解できる相手、できない相手、

いろいろな人がいます。だけど、そうしたことを認めないと。植物も動物も人間も、みんな多様性があって違っていいのだと思わないと。多様で、自由なほうが、楽しいし、おもしろいじゃないですか。まあ、でも、料理は人間の命に関わりますから、全て自由ではない。それは当然です。自然の摂理に合ったことは、常識としてあるわけですから、そのうえで自由になれるんです。

春畑: そうですね。そのように自分を信じるというか、思うことができれば、料理も気負わずにできますね。

土井: でも、私の知人は、自分で歌がうまいと思っていて、音が全然とれないのにみんなに披露するんですよ。あそこまで自由に歌わないでほしい。

春畑: 多様性として認めてあげてください(笑)。

土井: 認められない(笑)。

子どもたちの「安心」を育む

春畑: みんな外に出て、自由になるといいですね。でも、自由になるには「自信」が必要。

土井: はい。そして、「自信」は「安心」の上にしかできません。

春畑: 「安心」を得るにはどうすればよいのでしょうか?

土井: 子どもの居場所をつくってあげることです。居場所って、絶対自分を守ってくれるところ。家に帰って、「お料理があるところ」「作ってくれる家族がいるところ」が居場所になるんです。

春畑: 家庭料理が子どもの居場所をつくるんですね。

土井: 子どもの頃のあたりまえのご飯が、安心になって自信ができるんです。安心のない自信なんて考えられません。「安心」と「自信」を心にもてれば、世界に、未知の社会に出て行く「勇気」をもてるんです。それが「責任」「愛情」のある大人をつくるんだと思います。だからまず、「自分は絶対に愛されている」という安心感こそ、生きていくうえで大切なことだと思います。でも、今はお料理してもらえていない子どもたちがいることは悲しいですね。

春畑: そのような家庭では、どうすればよいのでしょうか?

土井: 子ども自身が小学校高学年ぐらいになったら、自分で料理できるようになると思います。日本人全員がまず、ご飯が炊けて味噌汁が作れるようになることだと考えています。料理できることは生きる力です。自分のために料理することは、自分を大切にすることです。同じように料理を作ってもらえない友達がいたら、「うちにおいでよ、お味噌汁を作れるんだよ、一緒に食べよ」って言えるでしょう。料理できれば、人を幸せにできるんです。すばらしいことだと思います。

春畑: お料理の力ですね。それに幸せな時間を人と共有できることがうれしいですね。

土井: 料理することは、人間にとっていちばん大事です。

春畑: 音楽も同じぐらい重要だと思いますよ。

“人間は人を幸せにすることでしか幸せになれない。
自分だけ幸せなんてことは絶対にありえないでしょう。だから、
人を幸せにすることが人間の行動の原点だと思います。”

土井: 音楽は人間にとって文化的な楽しみだけれど、まずは料理ですよ。その次が音楽(笑)。音楽では生きていけないけれど、料理は生きることに直結するのですから。

春畑: まあ、音楽だけでご飯は食べられませんが……(笑)。でも、音楽も遺伝子レベルで大切なことだと思うんです。音楽が家庭にあふれていることは大切です。

土井: 音楽は人に感情を伝えるための要素の一つとして、もちろん大切だと思います。でも、まずは料理ですね(笑)。現代社会はゆがんでいるけれども、その中で正しく生きようと思ったら、我々が自然の一部であることを忘れてはいけません。お天道様や自然がある中で、人々の暮らしが生まれています。「夏だからナスがおいしくなったよ」「秋だからサツマイモの初物が出たよ」とかね。ねっ、人間は自然に寄り添うと気持ちがいいのです。

幸せになるために

春畑: プロの料理の世界は、どのようなものなのですか？

土井: 料理人は別の世界の生き物ですね。星を取るため、人をよるこぼせるために作る料理は、「生きる」ための料理とは目的が違います。しかし、完璧な料理は作ろうとしても作れるものではありませんから、苦しいですよ。他の人は気付かないけれど、ほんとうに苦しいんです。「昨日の料理のほうがよかったな」と思うこともありますから。ずっとしんどかったですね、私はね。エネルギーがいるんですね。料理は怖いのですよ。自分を丸裸にされて見られているような気持ちになるんです。

春畑: 毎日全く同じ料理に仕上げるのが難しいからですか？

土井: ベスト、パーフェクトをねらって、どんどん神経質になっていくんです。右にあるものを左に置き換えるだけでも、味は変わることを知っていますから。人の手で触れれば味は落ちるから、できれば指一本触れないで料理したいと思っています。他にも味が変わる理由は山ほどありますから。「こちらに置く」と決められたものでも、違う方法で進めてしまうスタッフもいる。自分もそうだったかもしれない。自分が料理長になると、たくさんのスタッフと一緒に仕事をするので、気になることだらけ(笑)。そういうことがあって、また

忙しいと間違いは起こるんです。そういう意味では、自分のことですら信じてはいけないんですね。自分も間違えることを知っている。きちんとお客様の人数に合わせるお皿の数だって、10や20の数でも

間違えるんです。「絶対に間違っていない」と言い張る新人もいますが、間違わないと思っているうちは間違えるものです。

春畑: 家庭料理は「毎日同じ完成度」でなくてもよいけれど、やはり毎日作らなくてはなりません。

土井: 確かに、自分の都合で今日はお休みって言えないのが家庭料理ですね。見返りを求めない、家庭料理は無償の愛です。そういう意味では、音楽ももとは見返りを求めないんじゃないですか、それは母親の子守唄かもしれないですね。

春畑: そうですね。あるいは家族の誰かの鼻歌かもしれません。

土井: 見返りのない料理や音楽は非常に豊かなものだと思います。「料理も音楽も習わないとできない、習っていない自分は下手」と決め付けている人が多いようです。下手だからこそ、その人の誠実さとかが見えてくると思うんです。

春畑: 正しい技術があるから、よいというわけではないと思います。でも、周りの人と同じ水準でないと気にする人は多いでしょう。

土井: 日本人は、何でも上手じゃないと人前でしてはいけないという意識が強いですね。上手下手の区別、おいしい・まずいの区別なんて、音楽にもお料理にもなかったんです。そういう時代の中でも「すごいもの」はできてきた。評価を求めないところに、すごいものができる秘密があるのかもしれません。だから下手だっていいんだと気付くと、けっこう楽ちんに楽しんで人生を送れるし、人を幸せにすることもできるんじゃないかと思っています。

春畑: みんなお互いが幸せになれますね。

土井: そう。やっぱり人間は人を幸せにすることでしか幸せになれない。自分だけ幸せなんてことは絶対ありえないでしょう。だから、人を幸せにすることが人間の行動の原点だと思います。



土井善晴

『一汁一菜でよいという提案』

グラフィック社 2016年 定価(本体1,500円+消費税)

長年にわたって家庭料理とその在り方を研究してきた土井善晴氏が、現代にも応用できる日本古来の食のスタイル「一汁一菜」を通して、料理という経験の大切さや和食文化の継承、日本人の心に生きる美しい精神について考察します。



春畑セロリ氏と土井善晴氏。
東京都内で

授業者に訊く— 1



既習曲『ジャンプ』を、体を動かしながら歌う

「演奏したい」気持ちを育む、楽しみながら身に付ける音楽

授業者：中野美由紀（北上市立黒沢尻北小学校） 聞き手：蓮沼勇一（合唱教育者・白ひげ合唱工房主宰）

今回最初にご紹介するのは、北上市立黒沢尻北小学校の3年生です。授業開始のチャイムが鳴る前から、子どもたちは体を動かしながら元気いっぱいに歌っています。授業中も一人一人が積極的で、楽しそうに豊かな歌声を響かせている姿が印象的でした。対談では中野美由紀先生に音楽を指導するうえで大切にしていることや、子どもたちのよさを引き出すための工夫などについてお話を伺いました。

蓮沼：私は昨年退職しましたので、実際の授業を久しぶりに拝見しました。やっぱり現場はいいですね。私もまた授業をしたいなと思いました(笑)。先生はふだん音楽活動をさせるうえで、どのようなことを心がけていますか？



○はすぬま・ゆういち

合唱教育者・白ひげ合唱工房主宰。国立音楽大学卒業。声楽を鈴木惇弘、平良栄一、指揮法を小松一彦、河地良智、合唱指揮及び合唱教育指導法を小林光雄の各氏に師事。第8回音楽教育振興賞（助成部門）受賞。1996年から5年連続でNHK全国学校音楽コンクール全国コンクール小学校の部に出演し、金賞4回、銀賞1回など、受賞歴多数。

中野：「楽しむこと」がいちばん大切だと思っています。そして「こちらの思いを押し付けたくないこと」。この2つをいつも心がけていますが、うまくいかないときもあります。

蓮沼：その2つの思いは、授業開始時から

伝わってきました。先生は教え込むことをじっと我慢して、うまくサジェスションしながら子どもたちの気持ちを引き出していました。

中野：それから、楽譜を読むための指導も大切にしています。以前、他の学校で高学年を教えていた頃に、楽譜を読む力が身に付いていない子どもが多く、なぜだろうと考えていました。この学校では中学年を教えることが多いので、音符や読譜力を少しでも身に付けてほしいと思い、徐々に教えています。子どもたちが大人になったとき、楽譜が読めれば役に立つと思うんです。

蓮沼：私にも同じ経験があります。中学校で指導していた頃、1年生で読譜力が身に付いていない。なぜだろうと思っていましたが、小学校に行ってみて、必要なことを教わっていないのだと気がきました。せめて、音の高低が分かるぐらいにしたいと思いましたが、自分で教えてみると、その難しさを感じました。

中野：読譜力は、今身に付けておかないとこの先教わる機会はないと思います。以前、ピアノを習っている就学前の子が楽譜の“ドレミ”をすらすらと読んでいるのを目にしました。自分が一生懸命教えている

小学生は片仮名で音名を付けてやらなければ読めないのに、どうしてだろうと考えたとき、文字があると音符の位置を見ることをせず、ただ文字を読んでしまうからではないかと思いました。

蓮沼：楽譜が読めるようになるには、なるべく小さい頃からできるだけ早くソルミゼーション（階名で歌うこと・読譜と表現の訓練）を積み重ねていくことが大切です。本来、段階を踏んだ学習を6年間も積み重ねていけば、音符は読めるようになるはずですが、でも、その手だてをこれまでの日本の教育現場は講じてこなかったのだと思います。

音楽で体を動かすこと

蓮沼：チャイムがなる前に、既習曲『ジャンプ』を歌いながら、先生自身も子どもたちと体を動かしていましたね。

中野：今日は、子どもたちが疲れなければいいなと心配になるぐらい、みんな元気でした。

蓮沼：声を出しながら体を動かすのは、子どもにとってあたりまえのことなんですよ。ね。「よい姿勢をするとよい声が出る」という



のは大人の発想です。子どもが40分間もピシッと背筋を伸ばしてよい声で歌うことができれば、それは奇跡ですよ(笑)。

中野: 難しいです(笑)。『ジャンプ』は最初に子どもたちと歌います。体を動かすと声が出るようになるし、笑顔にもなります。「どんな声でも受け入れる」という、授業の取りかかりのための活動です。

蓮沼: その前の『茶つみ』の歌唱なども、取りかかりのための活動ですか？

中野: はい。『茶つみ』『おちゃらか かい』『なべ なべ そこ ぬけ』も体を動かすので、子どもたちの取りかかりがよくなって一生懸命歌うようになります。『茶つみ』や『もみじ』は、学校で教わらなければずっと知らないまままだと思うので意識して取り入れています。子どもたちはとても喜んで歌います。

蓮沼: 授業の中でも、音楽に合ったさまざまな動きを子どもたちにさせていました。先生の指揮に合わせて手の力を抜く動きをするときに、とてもきれいに力を抜く子が何人もいました。あの動きはブレスとつながって、音楽の流れをつくり出していますね。

中野: 体を動かしながらのほうが子どもたちは理解できます。音高感も「ドレミ」は上がる」「ミレド」は下がる」ということから教える必要があります。最初は分からなくても、体を使っているうちにだんだん理解していきます。

蓮沼: 上行形の「ドレミファソ」をピアノで弾くと子どもたちが立ち上がり、下行形の「ソファミレド」だと座りますね。そのとき立ったり座ったりするスピードを変えることはありますか？

中野: パッと立ってほしいので、今のクラスではまだゆっくり弾くパターンはやって



授業の取りかかりのための『茶つみ』

いません。歌い終わったあとには、音楽のイメージに合わせて座るように話しています。

蓮沼: そのような、演奏したあとの余韻を生かした体の動きは大切だと思います。これは多くの現場の先生がたにもぜひ実践していただきたいことです。

中野: おじぎするときの音楽も、“頭を下げたくなる音楽”だということから教えています。

蓮沼: 先生の授業は始まる前から終わったあとまで、全て音楽の要素で埋め尽くされていて、片時も音楽から離れることはありませんでした。子どもたちは間違えながらもだんだん「聴く耳」をもつようになるんですね。

毎回1人ずつ歌う

蓮沼: 先生は1人で歌って見本を示していましたが、子どもたちが歌うときも一緒に歌っていました。

中野: ふだんから自ら歌うことが多いです。私が歌うと、子どもたちは「自分も1人で歌うんだ」と最初は驚きますが、そうすることで「歌いたい」という気持ちをもってくれます。今日はピアノを弾きながら歌うことも



○なかの・みゆき
北上市立黒沢尻北小学校 教諭

考えましたが、子どもたちから離れてしまうと、歌声が乱暴になってしまうので、近くの電子オルガンを使用しました。電子オルガンは録音もできて、テンポも変えられます。

蓮沼: 『とどけよう このゆめを』では発声練習も含めて、メロディーを2小節だけ子どもたち全員に、1人ずつ歌わせましたね。

中野: 毎回、授業のどこかで必ず1人ずつ歌わせませす。子どもたちは慣れているので平気です。ただし、歌うメロディーは一部で、短く設定します。失敗を目立たせないためです。

蓮沼: あのように子どもたちの声を聴けると、子どもの歌が現在の段階にあるのかが分かりますね。評価するためではないけれど、



子どもたちの声に注意しながら、近い距離で指導する中野先生

苦手意識を取り除く

蓮沼: 先生は、子どもたちに苦手な箇所を取り出しなさいと伝えましたが、その箇所を一定以上は追求しませんでした。

中野: そこだけを取り出して長く歌っていると、子どもたちはだんだん分からなくなってしまいます。子どもたちにとって、今はそのようなことを突き詰める段階ではありませんので、深くは追求しません。

蓮沼: できている子とできていない子がいましたが、全体

であのレベルまでいけば今日はそれできたとされました。その結果、練習していない箇所の音程までよくなりました。これは合唱(歌唱)ではよくあることで、できないところを少人数で練習しても上手に歌えなかったのに、全体で歌ってみると悪かったところが修正されている。おそらく、気持ちや感覚が成長するのでしょう。

中野: 私が子どもたちと一緒に歌う回数が多いのは、まず音程の不確かなところを何とか正したいと思うからです。今は完全に任せられないけれど、徐々に私の聴く時間が増えて、最後には聴くだけになるといいと思っています。

蓮沼: 子どもたちの顔を見ていると、「歌いたい」という顔をしています。先生が「歌わないで聴いてね」と言っても、歌ってしまう子がいました。そこで先生は1、2回の注意はするけれど、それ以上は注意しません。

中野: 音楽の時間に注意しすぎてはいけないという気持ちがありますし、今日歌って

しまった子はいつも以上にがんばりすぎていたんです。実は、あの子は去年まで「音程がとれない」と言われていました。本人は歌うのが大嫌いで、音も一本調子でした。でも、指導によって声は変えられたから、すぐにうまく歌えるようになりました。楽しくなったのだと思います。楽しくなったから止まらないんです(笑)。

蓮沼: 授業の見学に来た私たちに、自分の歌を聴いてほしかったのでしょうか。

中野: 「歌える」と思ったら1人で歌いたいですね。だけど、集団のルールを身に付けさせることが、まずは重要です。

蓮沼: 「今はちょっと我慢する時間だよ」と伝えるのがよいでしょうね。でもあの子の歌、もっと聴きたかったな。

中野: このクラスには補聴器を付けている子や、特別な支援を要する子もいます。最初は補聴器を付けている子も「音程感覚が……」と言われていましたが、だいぶ自信をもち、今日も1人できちんと歌えました。家でも大きな声で歌っているそうです。

蓮沼: 家庭でも歌うことで、その子の生活の中に音楽が溶け込んでいくんですね。音が一本調子になってしまう子の原因は、何だと思いますか？

中野: 子ども自身にいろいろ声を出す経験がなかったり、自分の声を開発することができなかったりしたために、話し声のままになっているのだと思います。また、音が取れないことを、家族に指摘されて歌わなくなってしまう場合もあります。ですから、なるべく早い段階で「音が取れない」という苦手意識を取り除いて「自分もけっこう歌えるな」と思わせてあげたいのです。

結果的に評価にもつながります。

中野: そうですね、子どもの声が変わったときはすぐに分かります。全体の指導をしながら、個人に合った指導も取り入れたいという気持ちがあります。

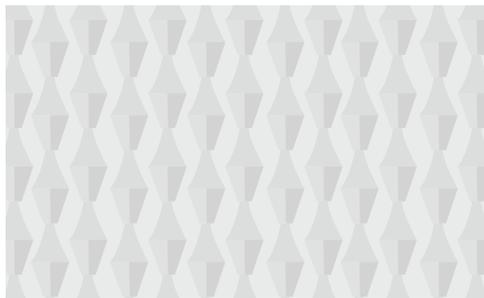
蓮沼: 日頃からそのようなことは必要だと思います。使っていた伴奏のCDを止めてしまっても、子どもたちは十分に歌えました。

中野: 子どもたちは、伴奏なしで歌うことにも慣れていきます。

蓮沼: そのように声だけの時間を積み重ねていくことはとても大切だと思います。私たち、指導者側はついピアノ伴奏を弾きたがりですが。

中野: 伴奏があると、確かに子どもたちは盛り上がるし喜びますね。

蓮沼: 伴奏がないと、よいところも悪いところもはっきり分かってしまいますが、絶対に必要な活動です。



理解を深める問いかけを

蓮沼: 学校教育は長年「生きる力」の育成を目指してきましたが、音楽はどのように「生きる力」になっていくとお考えですか？

中野: 私自身は子どもの頃から歌が好きでした。歌は、うれしいときも悲しいときも、思わず口ずさんでしまうものです。音楽がその子の人生に寄り添い、どんなときにもその心を癒やしてほしいんです。子どもたちが成長していく過程で、心が癒やされる歌に出会ったとき、授業で学んだことがその歌を気持ちよく歌う助けになればいいなと思います。

蓮沼: “歌を歌う”といえば、みんなが楽しく歌う様子がよくクローズアップされますが、人生の中で歌が支えや助けになる場合は、うれしいときよりも悲しくつらいときのほうが多いかもしれませんね。音楽は、自由であるべきだと思うんです。曲のイメージを文章や絵で模造紙にまとめたものが、壁に貼られている様子をよく目にしますが、あれはあくまでも集約された結果です。



『とどけよう このゆめを』を歌う前に、曲について楽譜を見て気付いた情報や特徴を発表する

むしろその過程で出てきた、子どもたちの気持ちや考えのほうはずっと大切です。歌にのせたいメッセージは、100人いたら100人違ってよい。そのように進めていくと、不思議なことに歌がバラバラにならないんです。子どもたちが「合わせたい」と思うからなのでしょう。

中野: 今日歌った『いつかこの海をこえて』は、最初のうちは歌うことだけで精いっぱいでした。東日本大震災がきっかけでつくられた曲ですが、子どもたちは震災もよく覚えていません。けれども、みんな

で「この曲はどんな気持ちが大切かな」と考えていくうちに、気持ちが膨らんでいきました。これは「今月の歌」なので、一つの思いに集約しなくても一人一人が心を込めて歌えばよいと思っています。「隣の友達を大切にしよう。それぞれがいろいろな考えをもって、一人一人個性が違っていいんだよ」という気持ちも育てています。これは特に

学級で歌うときに気を配っていることです。

蓮沼: 『いつかこの海をこえて』の中で、子どもが「ここを大切にしたい」と言ったとき、先生は「どんな気持ちで、どこをどうするの?」とすぐに聞き返していました。

中野: 「大切にしたい」だけではなく、「大切にしたいから、こんなふうに歌ったらいい」というところまで上げたいのです。子どもたちの声はまだそこまで出来上がっていませんが、曲に合った声や歌い方はあります。今はそういうことを教えていて、子どもたちも理解し始めている段階です。

蓮沼: 最近の若い先生は「カッコいい」「すてき」と言うけれど、「どこが、どうすてきなのか」という問いかけが大切です。その問いかけで子どもが考えたり思ったり気付いたりして、それをさらにみんなで共有することに意味があります。子どもは他の誰かが新しい発見をすると気になるんです。そして「僕も私も」と次の時間に備える。それが成長です。その「共有できたこと」をみんなで実行することが「協働」で、「人とともに生きていく力」につながるのでしょう。



最後は歌とリコーダーに分かれて演奏する

やる気・元気・集中力

蓮沼: 先生は子どもたちの主体的な気持ちを大切にしているように見えました。

中野: 家に帰っても音楽の時間に習った曲を歌うような子どもを育てたいと考えています。教科書の曲を歌うことは、自然なことだと思います。「今こういう曲を学校で勉強しているんだな」と、ご家族に教科書なしで伝えられる教科が音楽だと思うんです。

蓮沼: 先生の授業は、あつという間に感じました。

中野: でも子どもたちの集中力をもっと高めていかないと……。意欲はあるので、もっとしっかりできたらと思います。

蓮沼: 子どもたちが最初からしっかりして

いたら、我々教師の仕事はなくなりますよ(笑)。今日の授業を拝見していて、子どもたちがここまでくるために、たくさんの段階を踏んできたのだらうなと思いました。子どもたちはよく動いていましたが、あくまで音楽活動として体を動かしている。ルールに従って、動くところと静かにするところを切り替えていました。

中野: 3年生では「やる気」「元気」、あとは「集中力」が続くかどうかを大切にしています。指導をしていると、子どもの中には、最初から歌心や音楽性をもっている子もいるんだなと感じます。

蓮沼: どうしたらこんなに素晴らしい子が育つのだろうと、驚くこともありますよね。

中野: はい。それに、教えた以上のことが

できる子もいるので、その子の力も伸ばさなくてはならないと思っています。すばらしい子はたくさんいます。その子のよさが他の子にも広げられるような投げかけをしたいと思います。そのような橋渡しやすばらしさを広めることも、私たち教師の仕事だと常に感じています。



左から蓮沼勇一先生、中野美由紀先生

本時の授業の位置付け

本時は「リコーダーとなかよしになろう」の第4時です。前時までにはリコーダーの基本的な演奏の仕方を学び、シラソの3音できている曲を学習しています。本時では『とどけよう このゆめを』を覚え、明るく楽しく歌う中で、前半と後半の旋律の特徴に気付かせます。後半では、リコーダーの副次的旋律を練習し、歌と楽器の旋律を重ねることのおもしろさや心地よさを感じ取らせるようにしていきます。



多田克巳先生
北上市立黒沢尻北小学校 校長

授業の流れ

	学習の内容、学習活動	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既習曲『ジャンプ』を歌う。『茶つみ』や今月の歌を歌う。 ○ 学習課題の把握 楽譜を提示し、曲全体の特徴を捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽的雰囲気づくりに努め、次の活動へつなげる。 ・ リズムや音の流れ、歌詞に注目する。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題提示 「『とどけよう このゆめを』を覚えて楽しく歌おう。」 ○ 主旋律を覚える。 ○ 楽譜を見ながら、旋律の特徴に気を付けて歌う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 前半と後半の旋律の特徴を確かめる。 ○ 後半の副次的な旋律を合わせて演奏する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ リコーダーの練習をする。 ・ 歌とリコーダーを合わせて演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音高や発声の仕方を意識して歌う。 ・ 前半と後半を聴き比べ、旋律の特徴を感じ取って、歌い方を工夫する。 ・ 階名唱をしながら指づかいを練習する。 ・ タンギングや息の強さを意識して演奏する。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習のまとめ <ul style="list-style-type: none"> ・ 重なり合う音の響きを感じながら歌ったり演奏したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音を重ねたときの響きの違いに気付かせ、次時への意欲をもてるようにする。

授業者に訊く—2



授業の冒頭『We'll Find The Way ～はるかな道へ』を歌う

生徒に寄り添い、音楽の力を伸ばす

授業者：長岡知里（名古屋市立沢上中学校） 聞き手：松浦光男（岐阜大学）

2校目は、名古屋市立沢上中学校を訪れました。この学校でも、休み時間から音楽室には歌声が響き、音楽の学びに向かう雰囲気がつくられていました。授業では1年生が『浜辺の歌』の歌詞の内容と強弱表現のかかわりを考え、歌唱表現に生かしていました。小学校の指導経験をもつ先生ならではの、小学校から中学校への系統性を踏まえた音楽の力を伸ばす授業をご紹介します。

「音楽室」という特別な空間づくり

松浦：50分間の限られた時間の中で、前時との関連性をもたせた、一体感のある内容の濃い授業だったと思います。また、TT(ティーム・ティーチング)という形態でしたが、その利点を最大限に生かして各先生の役割がしっかり分担されていました。今日は休み時間から『校歌』『We'll Find The Way ～はるかな道へ』を生徒たちに自由に歌わせて、本時に自然と入っていく流れでしたね。毎回このような感じで授業を進めていらっしゃいますか？

長岡：生徒は教室とは違って音楽を学ぶために音楽室へやってくるわけですから、ここに入ったら「音楽をする場所」と思えるよう特別な空間をつくりたいし、週1～2回の少ない授業でするので休み時間もフル活用しています。

松浦：皆、生き生きと歌ったり動いたり、自然に体を使っているところがいいなと思いました。

長岡：中学1年生なので恥ずかしがったり抵抗があったりする生徒もいるのですが、

この時期がとても大事だと思うので、入学した4月から席もあえて男子と女子の混合です。『We'll Find The Way ～はるかな道へ』はどちらのパートも歌えるようになっているので、日によって好きなほうを歌ってよいと言っています。難しくはないと思いますし、ノリのよい曲なので、中1の最初の時期には合っていると思います。

松浦：多感な時期なので、声変わりなどによって歌わない生徒もいるかなと思っていましたが、先生の取り組みはすばらしいですね。

長岡：ちょうど今日は変声期の話をしたのですが、きちんと声の出る仕組みを説明したうえで、「無理なく出せるところは気持ちよく歌おうね」と話し、歌声をとにかくほめるようにしています。出せない音域もあるので、似たような声質になってきた生徒どうしを近くの席に座らせるなどの工夫をして、「どう？ 歌いやすい？」と確認するように心がけています。

自由に音楽に親しむ

松浦：『We'll Find The Way ～はるかな道へ』と、本時で取り上げた『浜辺の歌』は、アウフタクトで始まります。指導のうえで難しい部分もあるかと思いますが、どのように捉えていらっしゃいますか？

長岡：アウフタクトや弱起という言葉での説明はこれからですが、まずは歌う前の準備と歌い出しの言葉の話をします。拍の流れを前奏から体で感じ、準備してから歌い始めようと言っています。

松浦：弱起は決して弱くそっと歌うのではなく、大事に歌う必要があると思います。そういうところが教育的にたいへん重要な場面ですよ。まだ入学して3か月程度の1年生なのに力強く歌っていました。長岡先生も一緒に歌うことによって生徒たちに息の遣い方やフレーズ感、表現方法のヒントが示唆されていたと感じました。

長岡：これはTTの利点です。ピアノをもう一人の先生にお願いしているので、私は生徒の前で歌ったり生徒の間に入って歌声を聴いたりすることができます。

また、休み時間に生徒が音楽室に入ってきて、流れている音楽に合わせて歌っているときから「先生は健康観察をしているよ」と言い、生徒の調子を見るよう意識をしています。



○まつうら・みつお
岐阜大学 准教授

松浦:中には手を広げるような動作をしながら歌っている生徒もいました。詩の内容や音楽の流れを勉強したうえで、その知識を基に生徒が先生と一緒に歌うことによって、表現力が深まっていると感じました。

長岡:私は以前小学校にも勤めていました。子どもたちは音楽が流れると自然に体が動いていたのですが、それが中学校では、動かずにまるで気を付けの姿勢のように体を硬くして歌う生徒がいます。そうではなく、特に最初の時期は「体から湧き出てくるものを表現していいんだよ」と声掛けをしています。中には、指揮者のように体を動かしながら、拍を感じて歌う生徒もいます。

松浦:たいへん重要なことですね。オーケストラ鑑賞教室などで先生が「背筋を伸ばしなさい、物音を立ててはいけない」という指導をしていることがありますが、

私は音楽って自由にしていいと思うんです。大学の授業で「音楽の授業を嫌いだった人はいいますか?」と聞くと、学生たちはけっこう手を上げるんです。「じゃあ音楽を嫌いな人はいいますか?」と聞くと誰も手を上げない。長岡先生がおっしゃったように、音楽の授業で「こうしなきゃいけない、こうあるべきだ」という考えを植え付けられてしまっている部分があると感じました。中学1年生といますと、小学校からの橋渡しの時期だと思います。小学校も中学校も指導された経験から、授業をするうえで意識していらっしゃることはありますか?

長岡:つい先日までは小学生で、身体表現をしながら音楽に親しんできているので、身に付けてきたものを見付け、その力を伸ばしたいと思っています。小学校で何を学んできたかを知らずに中1の授業はできません。小学校と同じ曲を歌うことがあっても、教師は何が違うのかをきちんと理解しておくべきだと思います。小学校と同じ話をしても飽きてしまいますよね。つながりを伸ばしたい、後戻りしないようにということに気を付けて、数少ない授業を有効に実施したいと考えています。ただ、音楽の表現として全体でそろえたり、方向性を示したりするのは教師の仕事だと思うんです。

松浦:身に付けた力を伸ばすということを念頭に置いて指導されているんですね。

呼吸から歌につなげる

松浦:授業の中で呼吸法についての声掛けがたびたびありましたが、特に息を吐くことに重点を置いて指導されていました。「まず息を吸いなさい」と言う先生が多いようですが、吐かないと息は入ってきません。それを先生はうまく表現なさっていたと思います。

長岡:発声の第一歩は呼吸だと思います。息を吐き切らないと吸えません。空っぽになるまで息を吐き切って、息を入れるしかない状態にするというのは、歌いながらではなかなか体感できないので、呼吸の練習は自分が音楽を担当した学校ではどの学年でも取り入れてきました。1年生はまだこれからですが、2学期に向けて少しずつ始めているところです。

松浦:呼吸の基本を分かりやすく説明されていて、おなかの使い方を意識させる言葉掛けが印象的でした。また、「スー、スー、スー」と息だけで歌わせる方法もよいですね。



先生自身が見本を見せながら呼吸の練習をする



長岡:おなかの使い方を体感することで、歌にも生かしてほしいと思い取り入れています。慣れると1曲全部、息だけで歌うこともあります。

松浦:その結果として、声量が増えて言葉も明瞭になったように感じました。また、フレーズが長くなって、無理のない声の出し方に変化していました。

長岡:特に変声期には男子は声を出しにくいと思いますし、楽しくなければ生徒たちは歌わなくなってしまうので、声を出すことが楽しいと思える空間をつくり「これが勉強につながっていたんだ」と、知らない間に習得できるのが理想です。

松浦:管楽器やリコーダーを演奏するうえで有効的だと思いました。ちなみに、アルトリコーダーは導入されていますか？

長岡:本校では、ソプラノリコーダーをメインで使って、アルトリコーダーは希望購入にしています。購入した生徒はアルトパートも覚えていこうという形です。しかし、リコーダーを扱う時間自体がなかなか確保できないのが現状です。身近な楽器なので本当は使わせたいのですが、なにしろ時間数が限られていますし、だからといって購入したけれども使わないというわけにもいきません。そこが難しいところですね。

松浦:校内合唱コンクールに時間を割かれてしまうという話を現場の先生から聞いたことがあります。そういうジレンマがありますね。

長岡:特に2学期は、授業時数の多くを使います。合唱コンクールは学級づくりの一つの手だてとして必要だという学校も多いようですが、結局曲を覚えるだけで精いっぱい、生徒がどう歌いたいか



『浜辺の歌』の強弱の変化を確認する

考えるのではなく、先生がこう歌わせたいという内容に終始してしまっははいけません。その曲で何を教えるか、何を身に付けさせたいかが大切です。

松浦:深く掘り込まないで終わってしまうところが、今後の課題ですね。

まるでオーケストラのよう！

松浦:音楽室には机がなく、譜面台を使用していました。珍しいですね。

長岡:実は音楽室をこの形にしたのは、私が授業を担当し始めた今年の4月からです。机の代わりに譜面台を40台用意しました。これまでに赴任していた学校でもほとんどはこの形に変えていきました。

松浦:譜面台がずらっと並んでいて、カッコいいなと思いました。



○ながおか・ちさと
名古屋市立沢上中学校 教諭

長岡:オーケストラみたいですよ。机に楽譜を置いて演奏すると、特にリコーダーを吹くとき、どうしても姿勢が悪くなってしまうので、前任校の小学校でも、高学年は譜面台を使っていました。また、バインダーを用意して、ワークシートに記入するときや席を離れてグループ活動



をするときなどに使用しています。

松浦:『浜辺の歌』を最初に歌ったときにも、すぐ止めて「譜面台が近すぎない？背中が丸まっていない？」と姿勢について注意していましたね。この言葉掛けによって、姿勢も演奏に影響することをしっかり意識させていたように感じました。

長岡:歌う姿勢は常に意識させています。そのためには環境を準備しないといけないので、できる限りのことはこちらで整えるよう心がけています。

生徒の気付きを引き出す

松浦:前時では、なぜ作曲家が8分の6拍子で作曲したのかを考えたそうですね。

長岡:はい、8分の6拍子の他、3拍子や4拍子の指揮を実際に振ってみて、どの指揮がふさわしいかを考えるという内容でした。

松浦:本時では、前時の復習としてピアノ伴奏がどのような情景を表しているのかを振り返りました。「浜辺の歌」という題名が付いていることもあるでしょうが、「波が寄せたり返したりする様子を想像した」「同じ音を使っていて包まれている感じがした」「優しくてきれいな情景が思い浮かぶ」といった生徒たちのよい言葉が出ていました。

長岡:ピアノについては少し前に『魔王』の授業があり、ピアノ伴奏が馬の蹄の音のようだという意見が出たり、ピアノの音にとっても大事な役割があることに気付いたりしていたので、それと重ねて想像をめぐらせていたのだと思います。

松浦:そして『浜辺の歌』の歌詞の内容

と強弱表現のかかわりを考えようという学習活動では、第3フレーズ(10~14小節)の部分は「この曲の中でいちばん伝えたい歌詞である」「(いちばん盛り上がっている)重要なところ」「風とともに波が強くなって、(作曲家が)感動したから」など、歌詞をみごとに捉えた表現が出ていました。

長岡:本時は強弱にポイントを絞った内容にしました。前時は曲の形式についても取り上げました。少し前に『主人は冷たい土の中に』や『エーデルワイス』で二部形式の曲を扱い、音楽が繰り返される時にどういう変化や効果があるかについて学んだので、生徒たちはこの部分には何か仕掛けがあるという目でこの曲に取り組んでいたのだと思います。もちろん、中にはそういった言葉が出てこない生徒

もいるのですが、今回の授業のようにグループで対話することでそれを補うことができます。次の時間の前半では、本時の内容をどう表現に生かすのか考えて個人やグループで練習をし、後半で発表会をしようと考えています。

松浦:最後に『浜辺の歌』の魅力に十分に引き出し、生徒なりに表現を深めていくという方向性ですね。

長岡:見通しをもって授業をしないと生徒たちは何をしたいか分からなくなってしまっているので、活動時間や内容の指示を明確にするようにしています。1人で考える時間もそうですが、グループ活動の時間も長く与えればよいというものではないので、ワイワイ話して結局何をやっていったんだ？とならないために、時間はしっかり決めています。



各グループで歌詞の内容と強弱表現のかかわりを考える



松浦: 生徒の集中する時間は「3分」が一つの目安だと聞きます。長ければ長いほどだれたり、おしゃべりを始めたりしますよね。適切に時間を区切って、生徒たちを飽きさせない流れがすばらしいと感じました。このような、ある意味オーソドックスで奇をてらうことのない授業が最近失われつつあるような気がします。

長岡: 私は日本の歌をきちんと教えてあ

げてほしいと思います。生徒があまり歌わないからと言って、少しだけ歌って終わりにしてしまいがちですが、日本の自然や美しい歌詞など、そういったものをしっかりと教えたいという思いがあります。小学校にいたときも、中学校で教えている今も同じように思っています。でも生徒がつまらないと感じないようにどう工夫するかは、教師が考えることです。



左から松浦光男先生、長岡知里先生

本時の授業の位置付け

本時は「曲の表情と音楽を形づくっている要素とのかかわりを感じた表現」の第2時です。主体的に表現の工夫をするためには、音楽の要素の働きを捉え、曲想との関連を理解して、それを手がかりとすることが大切です。本時では、歌詞の内容と強弱表現とのかかわりについて一人一人が考えをもち、グループで言葉や音で対話する活動を行います。



野口正樹先生
名古屋市立沢上中学校 校長

授業の流れ

学習の内容、学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○ 二部合唱する。 ・ 『校歌』『We'll Find The Way ～はるかな道へ』を歌う。 ・ 「スー」と息を流して歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 周りの声をよく聴いて歌うよう伝え、声の重なりを感じさせる。 ・ おなかに手を当て、息を吸うとおなか膨らみ、息を吐くとおなかへこむということを確認し、曲の後半の強弱を意識させる。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時までの学習内容を振り返り、本時のめあてをつかむ。 ・ 『浜辺の歌』を歌う。 	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 歌詞と強弱表現のかかわりを考える。 ・ 第2フレーズ、第3フレーズの強弱表現と歌詞の内容とのかかわりを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 8分の6拍子の拍の流れやピアノ伴奏の特徴を感じ取らせる。 ・ 強弱の変化に着目させる。 ・ 「しのぼるる」「風の音」「雲のさま」などの歌詞から、様子や作者が最も伝えたかった情景について話し合い、なぜそのような強弱表現になっているのかを一人一人に考えさせる。 ・ グループごとで言葉や音で対話したことをホワイトボードにまとめ、全体で共有する。 ・ 第2フレーズと第3フレーズの強弱の変化を意識して歌わせる。
<ul style="list-style-type: none"> ・ グループで意見をまとめ、発表する。 	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 情景を思い浮かべながら、強弱を意識して歌う。 	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の振り返りをする。 	



特集

小学校音楽科におけるICT教育の現状と期待

新学習指導要領に「コンピュータや教育機器を効果的に活用できるよう指導を工夫すること」の一文が加えられました。また「プログラミング教育」「デジタル教科書」といったICT教育に関するさまざまなキーワードに関心のある先生も多いのではないのでしょうか？そこで、日頃からICT機器や教材を活用していらっしゃる先生がたにお集まりいただき、音楽科におけるICT教育の現状や、授業での活用、今後ICTに期待することなどについて、語り合っていました。

司 会： 藤井浩基先生(島根大学)
参加者： 菊池康子先生(つくば市立春日学園義務教育学校)
小梨貴弘先生(戸田市立戸田東小学校)
松長 誠先生(所沢市立小手指小学校)

ICTは便利？ 不安？

藤井：まず先生がたの学校のICT環境について、教えていただけますか？

菊池：つくば市は「どこよりも早く明日の教育に出会える学園を目指して」小中一貫教育を実現するためのICT教育に積極的に取り組んでいます。本校は小中一体型の義務教育学校ですが、パソコンが40台ずつあるパソコン室が2部屋と、移動式のWindowsタブレットが40台あります。また、電子黒板は各学年に複数台あり、音楽室にも入っています。茨城県内では、1人1台タブレットがある環境でICT教育を進めている

学校もあるという話も聞き、地域や学校によってICT環境の違いを感じます。本校は在籍人数から見ると、限られた設備でICTに触れる機会の少ないのが現状です。

小梨：本校はパソコン室にWindowsタブレットが40台。それをクラスごとに使うのが基本ですが、戸田市では教育委員会が活発に企業とのコラボレーションをしているので、いろいろな機器が導入されます。音楽の授業は、iPadやWindowsタブレットを並行して使いながら進めています。音楽室は、黒板を中心にして、その両側にモニターがあり、ピアノの上に置いたパソコンやタブレットの画面に書き込んだものがそのまま両側のモニターに表示されるようにしています。

松長: 本校では3年前に導入された80インチの電子黒板を音楽室に常設しています。また、Windowsタブレットが学校に40台あり、持ち運びもできます。ただし、1人1台タブレットという環境ではありません。ちなみに私は授業中iPodを首から下げて持ち歩きながら、Bluetooth*で接続して音声を再生したり、またiPadで動画を流したり、教科書や資料の必要箇所を部分的に撮影して映し出したりしています。これがあると歌詞などを拡大できるので、同じプリントを人数分用意する必要もないのが利点です。

藤井: 地域や学校によって環境に違いがありますね。自治体が積極的にICTを推奨しているところもありますし、文科省もICT環境の整備を推進しています。それから予算や設備の問題もあります。私は大学の中で無線LANが使えるのですが、ログインやセキュリティチェックの時間が意外にかかります。さらに、場所や回線の速度によっては急に途切れてしまうことがあります。

小梨: 授業中に無線LANを使っていて、急に接続が切れてしまうと、子どもたちがワーッとなくなってしまうことが予想されるので怖いですね。私はできるだけ有線接続にして授業の流れを止めないようにしています。無線でも映像を接続する技術はだいぶ進んでいます、授業でも早く安心して使えるようになってほしいと思います。

藤井: 現場の先生一人の力ではなかなか解決できないことが多いですね。

ICTでこんな授業をしています

藤井: 先生がたはふだんどのようにICTを活用されていますか？

松長: 私は子どもたちの技能の習得を早めるということに特化して使っています。リコーダーを例にとると、以前はアルトリコーダーを使って見本を示したり、子どもの近くで範奏をしたりしていましたが、今はあらかじめ自分で範奏を撮影し、指の部分をモニターに大きく映しています。その間に苦手な子どもを回り支援をすることができるので、指導上たいへん効果があります。最近はこちらの映像をパソコンの動画編集ソフトで加工して、楽譜や指導のポイントを挿入するほか、運指の映像を左右反転させて子どもにとって鏡に映したときと同じになるよう工夫しています。

菊池: 左右逆になっていると、子どもたちは違和感をもちませんか？

松長: 3年生の2学期前半ぐらいまでは、このほうが見やす

いようです。特に初期の段階では視覚から入る子どもが多いので「左手が上」ということが確実にになりますし、基礎的な技能の習得を早くするためにはたいへん有効です。

小梨: 私は、校歌の歌詞と写真が伴奏に合わせて映し出されるようパワーポイントで作りました。それまでは手元の楽譜や、紙に印刷した拡大楽譜を見ながら歌っていましたが、モニターに歌詞を表示することで、子どもたちは下を向かずまっすぐ前を向きながら歌うことができます。また、箏の鑑賞の授業では、箏のアプリで子どもたちに擬似体験させています。本物の箏に触れさせたいところですが、全員分は用意するのが難しいので、それをカバーするための活用です。私は1人1台でタブレットを使うというのは想定しておらず、子どもたちが対話を進めながら活用したり体験したりできるよう3~4人ぐらいのグループで1台を使うのがちょうどよいと思っています。

藤井: 1人1台あるのが理想的かもしれませんが、このような使い方ですと台数をそろえなければいけないというプレッシャーから解放されますね。



○ふじい・こうき
島根大学 教授

菊池: 本校では、鑑賞の授業などで活用しています。例えば『待ちぼうけ』のいろいろな歌い方の音源を聴かせて、その中でどの演奏のどういう音色や表現の工夫が好きだったのか、その部分や理由を発表し合うという学習です。複数の音源を入れたタブレットを2人に1台用意して、イヤホンでシェアしながら聴かせているのですが、まず1回目は全体で聴いて、その後はグループ別になって意見を交わしながら聴きます。歌い手によりニュアンスやテンポが違ったり、女声と男声でも印象が違ったりするので、音楽の要素を意識しながら自分が好きかどうかを基準に鑑賞させています。子どもたちも興味をもって取り組みますが、よい音質のイヤホンではないのがもどかしいところです。

*Bluetooth: 近距離にある機器を無線で接続できる通信規格。パソコンとマウスやキーボード、音楽プレイヤーとイヤホンやスピーカーの接続などに使用される。

小梨: イヤホンに関しては私も同感です。よいものを使うにこしたことはありませんが、100円ショップで数種類買って試し、付けたときの感じと音質からオンイヤー型のヘッドホンを使っています。



○こなし・たかひろ
戸田市立戸東小学校 教諭

菊池: また、音楽づくりの授業では、自分たちでつくったものを録画して見返し、試行錯誤する活動にタブレットを使用しています。あとは電子黒板を活用し、自分たちでどのように表現したいかをタブレットの楽譜に書き込み、全体で共有して表現に生かすという活動もしています。その際はデジタル教科書を使う場合もありますし、自分で楽譜を用意して表示することもあります。

藤井: 教材に使うアプリやソフトは、どのように探していますか？

松長: 私は「学び」や「音楽ゲーム」といったキーワードで検索して、教材としてふさわしいかどうかをチェックしています。

小梨: 慣れてくると、使いやすいどうかパッと見てすぐに分かるようになりますね(笑)。

松長: 教育を目的につくられているものと、そうではないものがあるので、教材としてどう使うか、教師の判断が大切だと思います。

指導スキルとしてのICT

藤井: ICTの活用が授業に効果的だとはいえ、その準備の時間や費用などをトータルで考えると、ハードルが高いと感じる先生が多いのではないのでしょうか。

小梨: 以前、パソコン室のパソコンで専用ソフトを使い、曲をつくるというICT活用の流れがありましたが、音楽室ではなくパソコン室だったことで下火になってしまいました。昨今はタブレットによってどの教室でもICTを活用できます。最初に準備の時間はかかっていますが、それが汎用化

することによって、どの先生でも使える教材が開発され広がるといいですね。

菊池: どんどん効率的になれば、働き方改革にもつながっていきますね。

松長: 音楽科の教員として音楽の技能はもちろん必要ですが、見方を変えるとICTスキルも同じように必要なのではないのでしょうか。音楽があまり得意でなくても、ICTによって教育を充実させることはできます。

小梨: 教員養成においても、教師になるためのスキルの一つとしてICTの活用能力も考えていただきたいですね。

松長: 「生音主義」の先生が多いですが、この時代なので、生音だけではなくデジタルの音楽を活用しながら授業をすることも新しい視点として必要だと思います。

菊池: 私は「生音主義」なので、ICTには多少抵抗があるのですが、活用できるようになりたいという気持ちはあります。ですからぜひ簡単で使いやすいソフトがもっと開発されてほしいです。



○きくち・やすこ
つくば市立春日学園義務教育学校 教諭

小梨: 一方で音楽に関していろいろな職種がAIに奪われていくという話があり、例えば擬似音源の普及により演奏家の需要が減ってきている中で、アナログのよさも同時に教えていかなければなりません。そのバランスが非常に大事になってくると思います。

藤井: 物心ついたときからスマートフォンやパソコンが身近にある子どもたちにとっては、古いものやアナログのほうが逆に新鮮に感じるかもしれませんね。

小梨: 今の子どもたちにとっては目から入ってくる情報が中心です。「ビジュアル・ラーナー」「ビジュアル・シンカー」という呼び方もありますが、そういった中で耳だけを頼りに鑑賞するのが難しくなっています。耳と同時に目で見る情報も併せ持った教材提示を教師が工夫していかないと、順応できず

授業に付いていけない子どももいます。

菊池: この前、自主的に目をつぶって鑑賞している子がいて、その子をほめたらみんながまねをしていました。

松長: それは最高の音楽鑑賞の仕方ですね。今はイヤホンで自分の聴きたい音楽を聴くことも多いのですが、一方で協働して聴く経験は音楽の授業でしかできないと感じています。

ICTと「生音主義」の共存

藤井: 授業で一緒に歌う、合奏する、音楽をつくる、聴くといった協働して音楽活動をする経験が、音楽の強みになっていくと思います。

小梨: 人どうしがかかわって、みんなで合唱や合奏の音楽をつくり上げることは学校教育でしかできないことなので、これからもしっかり守っていかなければなりません。その中でいかにICTを利用するか。利用されるのではなく、こちらがしっかり機械を使いながら人間性を養っていくといった視点が重要になってくると思います。

菊池: 私は5・6年生を担当していますが、「音階」や「リズム」などの〔共通事項〕を理解していない子どもがたくさんいます。そこで体を使って音楽をとらえ、感性を刺激することが理解につながるのではないかと考えています。その活動とICTとのバランスがうまくとれたらいいなと思います。でも、ICTが目的になってしまえば本末転倒なのかな、と。感性はICTだけでは育たない部分だと思います。例えば管楽器で*f*を吹くときの息づかいや、フレーズを取めるときの“ふわっ”とした感じはICTでは伝わりません。

藤井: 先日、アメリカのIT企業で音楽や芸術を専門にしている人を積極的に採用しているという記事を読みました。AIに置き換えられるスキルをもっている人ではなく、芸術的な感覚、人間にしかない発想力をもっている人が必要とされているそうです。そういう中でICTと「生音主義」との共存が今後の音楽教育の生命線ではないでしょうか。

松長: 今は過渡期ですので、今後私たちがどう切り開いていくかが難しいところだと考えています。学校ごとにICT環境が違いますし、デジタルの得意な先生もいれば、アナログの得意な先生もいる。まだ完全には移行しきれていないので、そういったところの融合をどうするのかについても話し合わなければいけないと感じています。

音楽科のプログラミング教育

藤井: 新学習指導要領に「プログラミング教育」に関する記述が入りました。単元の中に組み込まれた教科もありますが、音楽では具体的に踏み込んで示されてはいません。しかし、文科省から発表された「小学校プログラミング教育の手引」には、音楽づくりの事例が掲載されています。また、プログラミングに関する民間の本にも音楽に関する事例が書かれており、音楽はプログラミング教育に取り組みやすいのではないかという示し方がなされていました。この点についてどう思われますか？

松長: 音楽づくりの思考の過程がまさにプログラミング的思考であって、以前から行われているという感じです。



○まつなが・まこと
所沢市立小手指小学校 教諭

菊池: 以前に本校では、同僚の教師が「ボーカロイド教育版」で小学4年生が1年生に歌をつくって贈るという実践を行いました。自分のもっている技術だけでは到底つくれないと思われるメロディーをグループでつくることができ、プログラミング的思考を身に付けることができました。他にもコンピュータを使わない取り組みとして、付箋と表を使ったリズムアンサンブルづくりも行っています。同様に、ICTを使わなくても料理などもプログラミング的思考として捉えられるのではないのでしょうか。

藤井: 特に音楽づくりではプログラミング的思考は取り組みやすい内容ですね。ただ、先ほどの「手引」のQ&Aで、コンピュータやタブレットを用いない取り組みでもよいかという質問に対しては「試行錯誤を繰り返す『体験』が重要であり、(中略)プログラミング教育全体において児童がコンピュータをほとんど用いないということは望ましくない」という回答が書かれていました。

小梨: アンプラグドといって、コンピュータを用いずに行う活動もありますが、これからはICT機器を使ってプログラミング的

思考を養う取り組みを考えてほしいということだと思えます。音楽の授業でプログラミング的思考を生かすために、3年生の教科書に載っている音楽づくりの教材「手拍子でリズム」で、手拍子でつくるリズムの取り組みを「LOOPIMAL」というアプリで置き換えて行うにはどうするかを考えさせる検証授業を行いました。子どもたちにとっても親しみやすい内容ですし、〔共通事項〕の「反復」とプログラミングの「ループ処理」など要素を絡めることで、自然と子どもたちがプログラミング的思考を身に付けていくことができました。いきなりポンと子どもに渡すのではなく、教科書との関連性を考えたうえで使っていくのが重要だと考えていますが、教師側にある程度プログラミング的思考に関する知識がないと、音楽の中で取り組むのは難しいだろうと思います。



菊池: そのようなアプリを最初はシンプルに音楽の仕組みを理解する学習で活用し、その応用として音楽づくりで思いや意図をもった表現につなげていくこともできると思います。

藤井: 〔共通事項〕などと関連させながら限られた時間の中でどのように扱うのか、教師の技能が問われますね。

「デジタル教科書」の効果は？

藤井: 菊池先生はデジタル教科書を使用されているとおっしゃっていましたね。

菊池: 少しずつですが使っています。私は機械の操作が苦手ですが、提示したい資料が入っているので助かります。楽譜を大きく映せますし、音と楽譜が連動するので、ここを演奏しているんだと子どもが楽譜を捉えられるようになりました。合わせて、デジタル教科書を使い始めて楽譜を目で追えない子どもの存在を、あらためて実感しました。

小梨: 今のデジタル教科書は教師が提示して使うものですが、これからは子どもが使う「学習者用デジタル教科書」ができますね。他教科では紙の教科書と同じように書き込みもでき、教師側からそれを確認することもできる機能を拝見しました。ただし、音楽は著作権なども含めハードルが高い部分もあると思います。

藤井: デジタル教科書は動画がたくさん入っていて、プロの奏者による説明や実演もあるので説得力がありますし、もう一人アシスタントの先生がいるような環境で授業ができます。

松長: 必ずしも音楽が専門の先生が音楽を教えているとは限りないでしょうから、そういったかたにとっては強みになりますね。

菊池: 特に低学年だとなかなか専科の先生というわけにはいきません。

藤井: 私は学生に教育実習でデジタル教科書を使ってみるよう勧めています。指導経験のない学生が子どもの前で45分間授業をするのは大変です。緊張していますし、ちょっとしたことで授業がくずれてしまいます。そこでデジタル教科書がよいサポート役になってくれるんです。それがあっても心に余裕ができますし、学生はすぐに使えるようになります。

ICT、まずはここから！

藤井: 学生や若い先生は適応するのが早いのに、ICT化が進まない一つの原因は、先生のジェネレーションギャップがあると思います。幅広い世代の先生がおられ、地域差もある中で、まずは何からICTに取りかかればよいか、ご提案いただけますか？

小梨: モニターがない学校では、まずモニターを買ってもらったほうがいいですよ。

松長: 音楽科なので、音も大事です。音楽を子どもの席の近くで再生するのはとても有効です。例えばCDを入れ替えるために子どもに背中を向けてしまうと、その間に話し出してしまうことがよくあります。

小梨: ちょっとした間があるだけでも、子どもたちの集中力が落ちてしまいます。それをなるべく減らし授業のスピード感を大事にするために、デジタルメディアを生かしていくことが重要ですね。最近はスマートフォンやタブレットを使っている先生が多いので、それに音楽を入れて再生するだけでも第一歩になります。

藤井: ICTを使うにあたり、制約も多いですよ。例えば、YouTubeを授業中に見せることにもいろいろな意見があって、

いいという学校もあればダメという学校もあるようです。

菊池: 実際に法律上の問題はありますか？

小梨: 授業中見せることに問題はありません。ただ、YouTubeで配信されているものの自体の著作権が正規のものであるかどうか見極めるのは難しいところです。でも教材として使えるようなものがたくさんあるので、授業で見せたいですね。

藤井: 世界の諸民族の音楽などは、実際にそこに行かないと見られないものばかりです。

小梨: 私はパワーポイントも取り組みやすいと思います。歌詞を表示したりフラッシュカードのように音符を表示したりして、ビジュアル的にも子どもたちの視線を引き付けて集中させることができます。

松長: 「パワーポイントも難しいんです」という先生もいらっしゃいます。その場合は、手書きで書いたものを1つずつスマートフォンで撮影し、その写真を順に見せることをおすすめします。パワーポイントのような見せ方ができますよ。

小梨: ある先生に、私が音楽科だという話をしたら、「音楽科の先生は頭が固いんだよなあ」と言われました。教科としての音楽は、確かに懐古的で昔のよさを引き出そうという傾向があるかもしれませんが、前を向いて新しいものにも順応していくべきだと思います。特に今、実社会の中では音楽のデジタルメディア化が進んでおり、それと学校教育とが乖離してしまっている。音楽という教科が時代から取り残されないよう、我々教師側の意識改革を進めていかなければなりません。

藤井: 音楽の授業をするにはピアノやソルフェージュなどさまざまな音楽の技能が必要ですが、さらにICTの知識や技能も求められることになりそうですね。10年後を見据えると選べては通れない問題だろうとあらためて思いました。そして学校だけではなく、企業や自治体など社会全体が足並みをそろえていかないと、うまくいかない問題だと感じました。

座談会を終えて……

今般の学習指導要領改訂では、加速するグローバル化や情報化、技術革新が社会の変化を複雑で予測困難なものにし、2030年の子どもたちの未来に影響することが想定されています。また、昨今AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)といった言葉があたりまえに使われるようになってきました。

音楽科にもそのような変化が確実に及んでいます。座談会ではその最前線を目の当たりにしました。小梨先生、松長先生がタブレットを片手に、目にもとまらぬ早業で、アプリを操作される指先は、芸術的と言ってよいほど鮮やかでした。また、ここまで進んでいるのかと驚くほど、ユニークなアプリがたくさんありました。一方で、両先生とも「ICTを利用して、利用されてはいけない」とおっしゃっていたことが印象的でした。子どもが感性を働かせ、思考・判断し、学び合いを通して、創造的に音楽表現したり鑑賞したりするうえで、真にICTが必要かつ効果的な場合のみ選んで用いることが大切だと思います。

音楽科はテクノロジーの進化を適切に取り入れて充実を図ってきた教科です。これからもそうあり続けるでしょう。プログラミング的思考についても、音楽科では

特に新しい発想というわけではありません。思いや意図をもって音楽表現するために、必要な知識や技能を組み合わせて活用すること自体、プログラミング的思考につながっています。ここにうまくICT機器を活用できれば、音楽科はプログラミング教育を牽引する教科にもなりえるのではないのでしょうか。

目をつぶって鑑賞する子どもの姿が珍しく、周囲の子どもがまねていたという菊池先生から伺ったエピソードには、ほほえましさとともに時代の変化を感じました。「不易流行」という言葉があります。変わることはない音楽の本質を大切にしつつ、時代の変化にも適応し、音楽科の授業をバランスよく構想していきたいものです。

藤井浩基(島根大学 教授)



Wiener Sängerknaben × Yuta Miyake ウィーン少年合唱団 × 三宅悠太

“天使の歌声”が日本へ

通訳＝山下詠美子

清らかで澄んだ歌声が世界中で愛されているウィーン少年合唱団。1498年の創立から今年で520年、その長い歴史には、作曲家のフランツ・シューベルトや指揮者のペーター・シュナイダーも団員として名を連ねています。主に10～14歳の約100名の少年たちで構成される同合唱団は、「ハイドン組」「モーツァルト組」「シューベルト組」「ブルックナー組」という4つのグループに分かれ、世界各国を巡っています。今年は「ハイドン組」が来日し、4月28日～6月17日の約1か月半にわたり、各都市でコンサートを行いました。

今回のレポートでは、「ハイドン組」のカペルマイスター*を務めるジミー・チャン氏と3名の団員に登場していただきます。チャン氏からは一人一人の個性を伸ばすための指導についてお話を伺い、団員たちからは歌うときに苦労したことや寮生活の様子など、貴重な生の声を聞くことができました。聞き手は作曲家の三宅悠太氏です。

* 聖歌隊や合唱団などの指揮者兼指導者。

豊かな音楽レポーター

三宅悠太: 今日ありがとうございます。ようこそ日本へ！何かおいしいものは食べましたか？

全員: SUSHI! (お寿司)

ジミー・チャン: バイキングみたいに、いろいろなお寿司を楽しみました。

三宅: 今年はウィーン少年合唱団が創立されて520年、今回の

プログラムもグレゴリオ聖歌から日本の歌までとても幅広いですね。選曲される際に、コンセプトなど何か考えられていることがあればお聞かせください。

チャン: コンセプトはカペルマイスターが考え、コンサートのタイトルは主催者から提案されることが多いです。ただし、コンセプトに沿ったものでありながらも、やはりウィーン少年合唱団であるからには伝統的な音楽はプログラムの中に入れなければならない。これは私だけでなく、芸術監督のゲラルト・ヴィルト先生も同じ考えです。私にとって伝統的な音楽というのはヨーロッパに古くから伝わる音楽のことで、特にウィーンのクラシックを組み入れるべきだと考えています。

三宅: 日本だけではなく、韓国やシンガポールなどさまざまな地域を訪れ演奏旅行をされており、コンサートで扱う曲も幅広いと思いますが、異なる言語やそのディクシオン(発音法)については、どのように練習をされていますか？

チャン: 歌に関しては、まず何語で歌うにしてもテキスト、つまり歌詞が大事だと思います。例えばクラシック音楽をベースに考えると、ラテン語であろうがドイツ語であろうが最初に歌詞ありきで、それに音楽を付けていきます。その基本ができて初めて、他の言語にも同じような形で移行していきけるのではないのでしょうか。私自身がいろいろな言語の中で育ちました。英語やドイツ語、ラテン語、イタリア語、フランス語を勉強し、母国語である中国語も当然話せますが、言語を学ぶときはまず歌詞から入っていくという順序を大切にしています。そして、曲を披露する前には必ずスペシャリストを呼んで指導してもらいます。例えばフランス語の歌であればフランス人のスペシャリストを呼び、発音やニュアンス



子どもの歌には
人を動かす特別な力があると
常々感じています。

○ 三宅悠太(みやけ・ゆうた)

東京藝術大学作曲科をアカンサス音楽賞および同声会賞を受賞して卒業後、同大学院修士課程作曲専攻修了、音楽学部教育研究助手を3年間務める。在学中、奏楽堂日本歌曲コンクール第12回作曲部門第1位、ならびに第79回日本音楽コンクール作曲部門第1位、併せて岩谷賞(聴衆賞)および明治安田賞受賞。現代音楽から舞台音楽、合唱曲、教科書掲載曲に至るまで多岐にわたる作編曲を手がけ、2016年には第83回NHK全国学校音楽コンクール高等学校の部課題曲《次元》の作曲を担当し、作家の朝井リョウ(作詞)とのコンビで注目を集めた。作編曲活動の傍ら、全日本合唱連盟・NHK・TBS等主催の各種コンクール審査員、講習会講師等を全国各地で務めている。現在、聖心女子大学文学部、都立総合芸術高等学校音楽科、各非常勤講師。日本音楽教育学会会員。



前列左からモーリツ=ガブリエルくん、コウダイくん、後列左から三宅悠太氏、ヤンくん、ジミー・チャン氏



一人一人のもっている声
そのまま自然に出てきたときが、
最も人の心を動かすのだと
考えています。

○ Jimmy Chiang (ジミー・チャン)

香港で音楽一家に生まれる。4歳でピアノを始めてチェロと作曲も学び、13歳で初めてコンサート・ピアニストとして公の場で演奏した。16歳のときにロンドンのトリニティー・カレッジでフェロー・ディプロマを獲得。続いてアメリカのペイラー大学で学士号、ウィーン音楽芸術大学で芸術修士号を取得した。レオポルド・ハーガー、エルヴィン・オルトナー、ウォルフガング・ワツィンガーらに師事。2000年にアメリカのゴールデン・キー国際協会の舞台芸術ショーケース、04年にウィーンの若手合唱指揮者のための国際コンクールに入賞。07年にクロアチアのザグレブで開かれたロヴロ・フォン・マタチッチ国際指揮者コンクールで優勝。オペラ、交響曲、合唱曲など、広範囲のレパートリーをこなす。13年にウィーン少年合唱団のカペルマイスターに就任。

をチェックしてもらう。日本語の場合には、(今回のコンサートでは日本人の団員が2人いますが)日本人の先生が合唱団にいますので、そういったかたから専門家としての指導を受けます。

三宅: 日本語の曲を歌う際に苦労されたことや、他の言語を歌うときとの違いについて何か感じることはありますか？

ヤン: 日本語は、他の言語に比べてすごく難しいと感じます。例えばラテン語やイタリア語で歌うときは何となくドイツ語、つまり自分の母国語とのつながりがあるわけですが、日本語の場合には文字そのものが違いますし、それをローマ字にしたところでどうやって発音したらいいのか、教わることなくして自然にできるものではないと思います。

三宅: 皆さんのYouTubeのチャンネルでは日本語の歌も発信されていて、日本語もお手のものといいますか、とても自然に歌っているように感じました。

モーリツ: 他の言語と違って、日本語の発音が何を意味しているのか分からないのが難しい部分ですが、それでも自分たちが読める文字で書き表して歌うことはけっこう楽しいです。

三宅: 日本人でも(合唱現場で)日本語を美しいトーンで歌うことには苦労しています。例えば「う」という母音も、響きが薄くなりやすいので難しいですね。

一人一人の個性を伸ばす

三宅: 私は一作曲家として、子どもの歌には人を動かす特別な力があると常々感じながら曲を書いています。チャン先生は長年ウィーン少年合唱団の音楽に関わる中で、少年合唱の歌の力についてどのように感じていらっしゃいますか？

チャン: まず、私も同じ意見です。子どもは嘘をつかない。子どもというのは正直です。子どもの声も、一人一人のもっている声そのまま自然に出てきたときが、最も人の心を動かすのだと考えています。プロの合唱団として「この部分をもう少し繊細に歌って」



笑顔でインタビューに応じる団員たち

というような細かい指導はしませんが、子どもの声を別の人に近づけよう、模倣させようと思ったなら、その時点でその声は人の心を動かすものではなくってしまうのではないかと……。だから、なるべく自然体のまま伸ばし、もっている個性を最大限に生かすことが大事だと考えています。

三宅: 私も曲を書くだけではなく実際に音の現場に行ってレッスンする機会が多いのですが、チャン先生と全く同じ考えをもっています。型の中に統制するのではなく一人一人が開いていくことを目指し、個性を生かすという点に共感し、とてもうれしくなりました。

宮殿での寮生活

三宅: ところで、ウィーン少年合唱団のメンバーは宮殿で寮生活を送っている*と伺いました。1日のスケジュールや授業のカリキュラムはどのようなものでしょうか？

コウダイ: 起床はだいたい6時半から45分です。7時半に1時間目の授業が始まります。学校の授業は4時間目まで。4時間目が終わってから2時間、合唱団としての練習があります。それから昼食とお昼休み。ただし、ソリストのメンバーはその間にも練習が入ることがあります。

モーリツ: 午後はまた授業が4時間あり、それから夕食と自由時間です。自由時間にはみんなでサッカーをしたり、いろいろなゲームをしたりします。楽器を練習することもあります。

三宅: 楽しそうですね。寮生活の中ではさまざまなことがあると思いますが、いちばんつらいと感じるのはどういうときですか？

ヤン: 実をいうと、両親の下を離れるというのは考えられているほどつらいものではありません。24時間友達と一緒にいるわけですから。それはそれで楽しいけれど、ホームシックになる子もいます。ホームシックになっても、友達の前では強がって見せることが多いです。

子どもの声をよく聴いて

三宅: 日本は他の国と比べ宗教の柱が弱いとも言え、「信仰している宗教は何ですか？」と尋ねられてもなかなか答えられない人の多い国です。ヨーロッパのように教会で合唱音楽に触れる文化がほとんどありません。戦後の日本で、この教会の代わりになりうる場所(子どもたちが合唱に触れる場所)≒学校の教育現場と考えた作曲家たちはたくさんの新曲を生み出し、教科書に掲載されていき今日に至ります。しかし、学校現場では皆さんのように音楽が得意な子だけでなく、歌うのが恥ずかしい子やうまく声を出せない子がいて、先生がたも苦勞されています。チャン先生は、子どもたちと心の疎通を図ったり、あるいは声を出しやすい風通しのよい雰囲気をつくったりするために、どんな工夫をされていますか？

チャン: いろいろなメソッドがあると思います。これは個人的な意見ですが、そういったメソッドで教えるというよりは、「声を出したくない」「恥ずかしい」という気持ちになる原因を追究することが大切だと思います。多くの場合、不安だったり、自信がなかったりすることが根底にあります。楽譜が読めないことが原因の場合もあるし、人と比べられるんじゃないかという不安、つまり「他の人と比べて自分は下手だ」と言われるのが怖くて、なかなか声を出せないケースもあります。また、人前が苦手という場合には自信を付ける経験が必要です。「この子の問題は何だろう」と真剣に考えてあげることがいちばん大事だと思っています。

三宅: 優しさと愛に満ちていますね。すてきな先生に教えてもらって、子どもたちも幸せでしょう。最後に、この記事を読んでもらう日本の先生がたや子どもたちにメッセージをいただけますでしょうか。

チャン: オープンに生きていたほうがいいでしょう。オープンに接していくこと。音楽の先生の中には、音楽のことは分かっているけれど、音楽性のない子どもにどう接したらいいか分からない先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。そんなときには、オープンに「どうしたの？」と自分から近づいていき、手を差し伸べてあげてください。そして何よりも、子どもの声をよく聴くことが大切です。声を聴くというのは、彼らにとって問題になっているのは何なのかを本気で探っていくことだと思います。

* 団員の寄宿舎と学校はウィーンのアウガルテン宮殿内にある。

日本の 子どもたちへの メッセージ



音楽をやる喜びを知ってね。
(モーリツ)



楽しんで歌ってね。
誰でも歌は歌えます。
(ヤン)



まずは試してみること！
(コウダイ)

ウィーン少年合唱団 2018年日本公演

記者会見

去る4月26日、コンサートに先駆けて、東京のサントリーホールで記者会見が行われました。合唱団を代表して芸術監督のゲラルト・ヴィルト氏が感謝の言葉を述べると、会場は和やかな雰囲気に包まれました。ヴィルト氏はちょうど40年前に「ハイドン組」の団員として来日。当時はまだ日本が今よりも遠く感じる国であったこと、空港に到着すると多くのファンが待っていてくれたことなど、少年時代の思い出を懐かしそうに語りました。その後、カベルマイスターのジミー・チャン氏が、今回の2種類の公演プログラムについて説明。プログラムAは「動物の世界」をテーマに7か国語の歌が含まれていること、プログラムBでは「世界の歴史・音楽」をテーマに伝統的な曲から映画音楽までを歌い上げることなど、それぞれの特徴を紹介しました。記者会見の最後には、団員たちによる演奏『となりのトトロ』『トリッチ・トラッチ・ポルカ』が披露されました。



『トリッチ・トラッチ・ポルカ』を歌う「ハイドン組」のメンバー



挨拶を述べる
同合唱団芸術監督のゲラルト・ヴィルト氏



サントリーホール

記者会見データ

「キャノンマーケティングジャパングループ創立50周年記念
ウィーン少年合唱団 2018年日本公演 記者会見」
日程：2018年4月26日 会場：サントリーホール「ブルーローズ」



紹介ページ

http://www.kyogei.co.jp/data_room/vent/vol38_report.html

記者会見で演奏された『トリッチ・トラッチ・ポルカ』の動画をご覧いただけます。

Information

2018年秋以降に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研究大会

10月 October

● 20日(土)

平成30年度 全日本音楽教育研究会全国大会
大学部会大会

聖徳大学

〈大会主題〉

音楽教育が未来に伝えるもの

[問い合わせ]

大学部会事務局(小佐野) <k-osano@art.tamagawa.ac.jp>

聖徳大学音楽学部(河野) <vocal@seitoku.ac.jp>

メールの問い合わせは(小佐野)と(河野)にCcをお付けいただき送信ください。

● 25日(木)・26日(金)

第59回 九州音楽教育研究大会 熊本大会
第58回 熊本県音楽教育研究大会 熊本市大会
熊本県立劇場コンサートホール 他

〈大会主題〉

感じとろう 伝えあおう 高めあおう 音楽のよろこびを

[問い合わせ]

平成30年度九州音楽教育研究大会熊本大会事務局

大会事務局長 西原弘倫

〒861-2101 熊本県熊本市東区桜木4-13-23(熊本市立桜木中学校内)

TEL 096-365-1641 / FAX 096-365-1705

11月 November

● 1日(木)・2日(金)

平成30年度 全日本音楽教育研究会 全国大会
高等学校部会大会 栃木大会

宇都宮市文化会館

〈大会主題〉

音楽の喜び! 豊かな感性 ひろがる未来

[問い合わせ]

平成30年度全日本音楽教育研究会全国大会高等学校部会大会 栃木大会事務局

栃高教研音楽部会事務局 鈴木真由美

〒328-0016 栃木県栃木市入舟町12-4(栃木県立栃木高等学校内)

TEL 0282-22-2595 / FAX 0282-22-2534

● 2日(金)

第60回 北海道音楽教育研究大会 釧路大会
釧路市生涯学習センター(まなぼっと幣舞)他

〈大会主題〉

高まる 深まる 広がる 音楽の力

[問い合わせ]

第60回北海道音楽教育研究大会釧路大会事務局

釧路市立愛国小学校内 種市文彦

〒085-0057 北海道釧路市愛国西1-25-3

TEL 0154-36-5680 / FAX 0154-37-3085

● 8日(木)・9日(金)

平成30年度 全日本音楽教育研究会全国大会
小・中学校部会大会 和歌山大会
第60回 近畿音楽教育研究大会 和歌山大会
第56回 和歌山県音楽教育研究大会 和歌山大会
和歌山県民文化会館 他

〈大会主題〉

《のびる》《ひろがる》《ひびきあう》

～実りある音楽の授業～

[問い合わせ]

全日本音楽教育研究会全国大会・和歌山大会事務局

総合事務局長 岩本浩志

〒640-8311 和歌山県和歌山市寺内426(和歌山市立岡崎小学校内)

TEL 073-471-1750 / FAX 073-471-8900

iwamoto.hiroshi@wakayama-wky.ed.jp

教育芸術社ホームページでは、この他の研究大会
やイベントなどの情報も掲載しています。

http://www.kyogei.co.jp/data_room/event/



● 16日(金)

第66回 東北音楽教育研究大会 山形・庄内大会 第24回 山形県音楽教育研究大会 庄内大会

酒田市民会館「希望ホール」他

〈大会主題〉

つなぎ合おう 人・思い・音楽

～音楽学習の楽しさを求めて～

[問い合わせ]

実行委員会事務局

酒田市立浜中小学校 教頭 佐藤桂子

〒998-0112 山形県酒田市浜中宇上村370-2

TEL 0234-92-2011 / FAX 0234-92-3482

hamanaka@sakata.ed.jp

● 16日(金)

第60回 関東音楽教育研究会 千葉大会 第53回 千葉県小・中学校音楽研究大会 東葛飾大会

松戸市文化会館(森のホール21)他

〈大会主題〉

感じ取り 表現し 共に伝える音楽のよろこび

[問い合わせ]

大会事務局

松戸市立北部小学校 教頭 黒岩春生

〒271-0077 千葉県松戸市根本217

TEL 047-363-5251 / FAX 047-363-2629

hokubu-e@matsudo.ed.jp

● 22日(木)

第49回 中国・四国音楽教育研究大会 島根大会 第32回 島根県音楽教育研究大会 平成30年度 島根県高等学校音楽教育研究大会 島根県民会館 他

〈大会主題〉

感じてつなぐ！ 感じてひろがれ！

[問い合わせ]

事務局

松江市立美保関小学校 教頭 飯塚由紀子

〒690-1313 島根県松江市美保関町下宇部尾555-1

TEL 0852-72-9200 / FAX 0852-72-2844

mihonoseki-e@city.matsue.ed.jp

Spring Seminar 2019

—— 新作合唱曲による公開講座 ——

コンクール自由曲向けの新作発表会「Spring Seminar 2019」を開催いたします。

同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を合唱団、司会者、作曲家と学びます。

セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。

● 日 時：2019年3月28日(木)

会 場：武蔵野音楽大学(江古田キャンパス)

中ホール「ブラムスホール」

〒176-8521

東京都練馬区羽沢1丁目13-1

西武池袋線「江古田駅」北口 徒歩4分

西武有楽町線「新桜台駅」4番出口 徒歩4分

東京メトロ有楽町線/副都心線

「小竹向原駅」2番出口 徒歩9分

参加費：5,000円(高校生以下2,000円)

資料・楽譜テキスト代を含む

● 司 会：藤原規生

作曲家：[同声] 山下祐加、三宅悠太

[女声] 名田綾子、大田桜子

[混声] 佐井孝彰、千原英喜

合唱団：八千代少年少女合唱団

(指揮：長岡利香子)

女声合唱団 ゆめの缶詰

(指揮：相澤直人)

ユースクワイア アルデバラン

(指揮：佐藤洋人)

● お問い合わせ：

株式会社教育芸術社

スプリングセミナー実行委員会

TEL 03-3957-1168

FAX 03-3957-1740

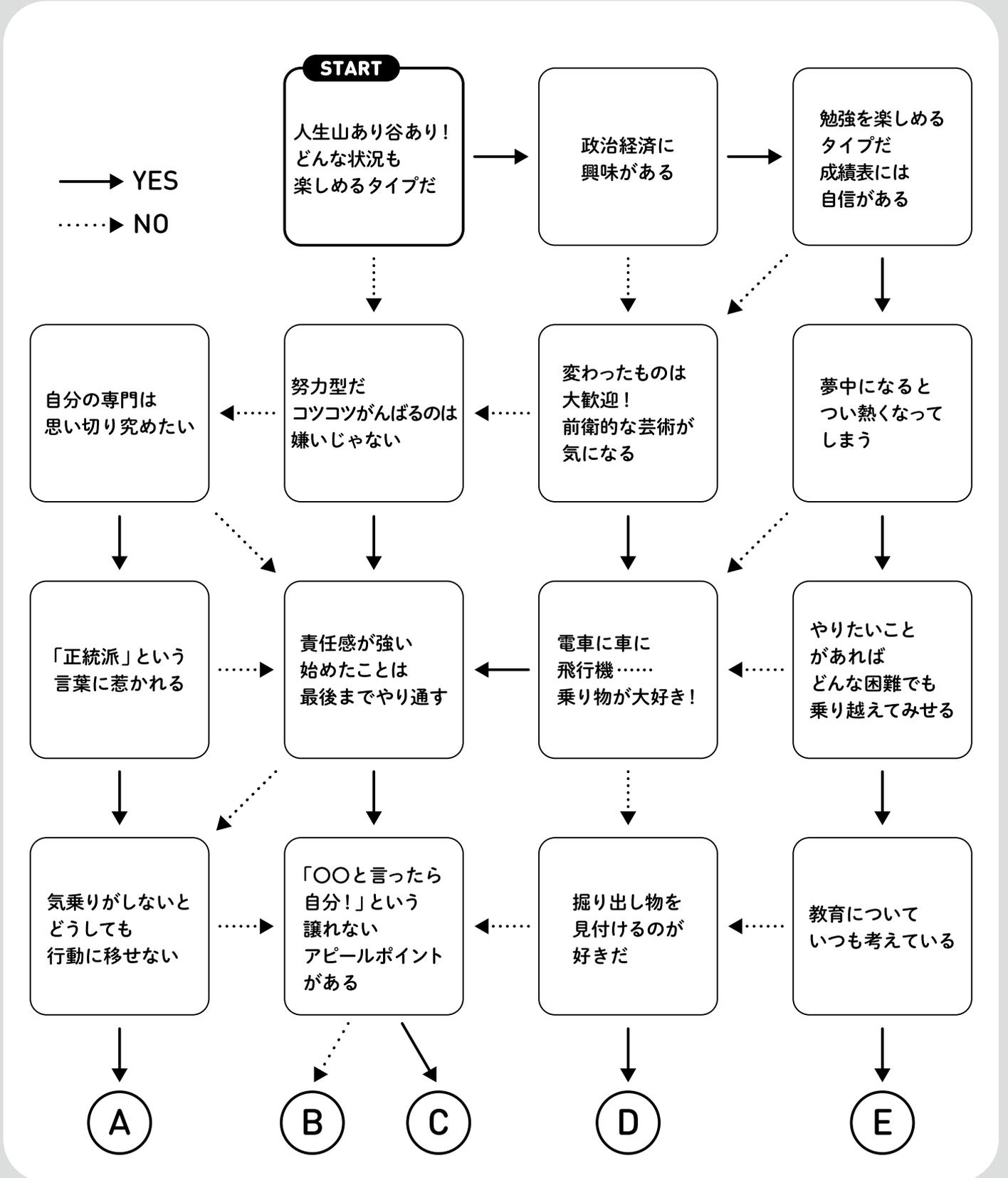
<http://www.kyogei.co.jp/>

音楽診断

第4回 名指揮者編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第4弾。今回のテーマは名指揮者です。
偉大な功績を残したマエストロたちの中から、あなたに似ているタイプの指揮者をご紹介します。

監修・解説 = 山田治生
Text = Haruo Yamada



A 気まぐれでも天才肌、オタク的なこだわりも カルロス・クライバー

大指揮者エーリッヒ・クライバーの息子として生まれ、アルゼンチンに渡る。スイスの工科大学に入るものの、親の反対を押し切って、音楽の道に進む。一度も音楽監督や首席指揮者のようなポストには就かず、客演で通す。ウィーン・フィル、バイエルン州立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、スカラ座など、超一流のオーケストラや歌劇場からのオファーが絶えなかったが、彼の出演はとでも限られていた。気まぐれな天才肌の指揮者と思われがちだが、音楽づくりは緻密でよく練られている。晩年は限定された十八番のレパートリーを繰り返した。その躍動的な音楽と踊るような優美な指揮姿が世界の聴衆を魅了した。



B 派手好きな帝王 ヘルベルト・フォン・カラヤン

カラヤンは、ベルリン・フィルの芸術監督を30年以上務め、ウィーン国立歌劇場芸術監督を兼務していた時期もあり、まさにヨーロッパの音楽界に君臨した。ゆえにしばしば「帝王」と称された。指揮者としては独裁的であったが、オーケストラの極意は室内楽的なアンサンブルにあると心得ていた。目をつむってタクトを振るその指揮姿は洗練の極み。同じオーケストラを何年にもわたって磨き上げ、メインのレパートリーは何度も再録音を行って、自らの美学の深まりを後世に遺そうとした。スピード狂で、スポーツカーを運転し、飛行機の操縦もできた。録音や録画の新しいテクノロジーにも大いに興味を示し、それらへの貢献もした。



C 職人氣質の大器晩成型 朝比奈隆

東京生まれ。旧制高等学校時代にヴァイオリンを始め、京都大学交響楽団で指揮活動を開始。京都大学法学部を卒業後、阪急に勤務したこともあったが、京大に戻り、音楽活動を本格化。第二次世界大戦中は、満州や上海のオーケストラを指揮。1947年に関西交響楽団(今の大阪フィルハーモニー交響楽団)を創設。亡くなるまで大阪フィルの音楽総監督を務め、同団を鍛え上げた。音楽的には大器晩成型。コツコツ積み上げる職人肌の指揮者だが、剛毅でスケールの大きな音楽をつくり上げた。19世紀生まれの巨匠の影響を受け、ベートーヴェン、ブルックナーなどのドイツ音楽を得意とした。晩年には、シカゴ交響楽団の定期演奏会に招かれ、ブルックナーの交響曲を指揮。



D 神童から鬼才に成長、気性の激しい(?)一面も ロリン・マゼール

5歳でヴァイオリンを始め、8歳で指揮デビューした神童。1960年に史上最年少でバイロイト音楽祭を指揮。1982年にはウィーン国立歌劇場総監督に上り詰め、指揮者としてのキャリアの頂点を極める。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでは、ヴァイオリンを弾きながらの指揮も披露。しかし、ベルリン・フィルでカラヤンの後任になれず、彼らとの演奏会を全てキャンセルする一面も。作曲家としてはオペラ『1984年』などを遺す。晩年、キャッスルトン音楽祭を創設し、オペラの上演や若手の指導に努めた。決して気難しい芸術家タイプではなく、大見得を切る派手な演奏も。サービス精神旺盛な人であった。



E 情熱的でフレンドリー、マルチな才能で大活躍 レナード・バーンスタイン

作曲家、指揮者、ピアニスト、司会者、教育者であり、クラシックだけでなく、ミュージカル、ジャズにも作品を残すなど、まさにジャンルを超越したミュージシャン。ユダヤ系アメリカ人の実業家の息子として生まれ、ハーヴァード大学で学ぶ。親の反対を押し切り、音楽家に。1969年にニューヨーク・フィルの音楽監督を辞してからは、フリーランスとして世界の一流オーケストラを客演。その情熱的な(時には飛び跳ねることも!)指揮が一世を風靡した。「ヤング・ピープルズ・コンサート」やPMF*の創設など、教育活動にも尽力。作曲では『ウエスト・サイド・ストーリー』が最も知られているが、交響曲やオペラも残した。フレンドリーな性格で、誰もが彼のことを「レニー」と呼んだ。



*パシフィック・ミュージック・フェスティバル:札幌で創設した国際教育音楽祭。

山田治生(音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ～大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人～ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の愉しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。

